

# “Bechstein Klavierschule”の今日的意味・意義

2017/10/6

ユーロピアノ株式会社

ベヒシュタインというピアノの個性・設計のコンセプトを活かしたピアノの演奏法・上達法（音楽的知恵の発展と、演奏する喜びの増大）を“Bechstein Klavierschule”という。それでは、このベヒシュタインの個性とはどのような優位性を持っているであろうか。この優位性とは他社のピアノと比較して何であろうか。

## 1 楽曲のテクスチャーがクリアに聴こえる

- (1) 複数のラインの役割を理解しやすい
- (2) 音色の演じ分けの効果を体感し表現することができる
- (3) 声部間の対話をより感じるすることができる
- (4) レジスター（音域）が意識しやすい

■ アンサンブル（オーケストラ、室内楽、合唱等）の醍醐味は複数のパートが対話することであり、各パートが相互に影響し合って立体的な音楽を形づくることである。ピアノのソロ演奏も実は一人アンサンブルをしているのであり、一人何役も演じながらそれぞれの声部を対話させ演奏することにより、音楽に立体感が生みだしている。ベヒシュタインは外声・内声の音量・音色をタッチでコントロールすることにより、アンサンブル（オーケストラ、室内楽、合唱）の各楽器が持つ音色や陰影・質感を模倣し、表現することができる。

■ ベヒシュタインは弾き手の創意工夫により、芯のある音色と丸い音色・クリアな音色と暗い音色・主役のようにはっきりした音色と雑味のあるくぐもった音色等々実に様々な音色を弾き分けることができ、結果オーケストラのような立体感のある音楽を奏でることができる。一人で演奏しながらあたかもオーケストラやアンサンブルのように各声部が立体的に聴こえ豊かな音楽の中に浸ることができるのである。その点に置いてベヒシュタインで演奏・練習することの優位性がある。

■ 「すべての音をしっかり均等に出す＝正しい練習でありよい演奏の基本である」という認識のままでは、音楽に深み・奥行きが出ず立体感のある演奏とは程遠い。

■ それぞれの音の分離が良く濁らずに響くことで、アンサンブルの各パートが独立して聴こえ、各々のメロディーを比較的容易に再現できる。

■ ロマン派の時代のピアノ音楽の多くは旋律、対旋律、ベース等の複数のモチーフが同時に絡み合う表現をされている。ベヒシュタインの「透明な響き」はオーケストラのように複数のモチーフが絡み合い響く動きを、弾き手にとって表現しやすく、聴き手にとって感じ取りやすくする。複数の動きを、違う音色で表現することで、響きは立体的になり、ピアノの響きがアンサンブルのような色彩感になる。

上記のことは、オーケストラ、アンサンブルの曲から編曲したピアノ曲がたくさんあることから、理解できる。

## 優位性のまとめ

- アンサンブル効果の体感とその表現
- 内声と外声の音量バランスの操作による変化
- 音の分離が良く、濁らない特性

その理由：この優位性はピアノの音域ごとに異なる楽器の音色を想定して設計されていることと、音の解像度が高いので意図した音楽表現が聴き手に伝わりやすい。

## 2. 楽器から教わる

- (1) 楽曲の構築性からの解釈
- (2) 響きの立体感の意識と表現上の技術習得
- (3) タッチの変化による音色・音の輪郭の違いの理解と技術
- (4) ノンレガートとレガートの響きの違いの理解と技術

### [音色について]

- ベヒシュタインは音色の変化がタッチにおいて非常に明確に出るので、演奏・練習において音色への気づきがうまれやすい。
- 音色がタッチの通り素直に出て、勝手に増幅されないでそれぞれの音のニュアンスを明確に出すことができる。

### [メロディー・フレーズ・音楽構造について]

- ベヒシュタインは音楽について深く考えずに弾くと、それがそのまま出てしまう。逆に、全体の中でそれぞれのフレーズが音楽をどう構成しているのかを考えてベヒシュタインを弾くことで、ニュアンスがより細かく鮮明に表現できる。
- 音楽の構築性を考えさせられる。どうしてそこでその音がかかっているのかを音楽全体の構築プロセスの中で見ることができる。
- ピアノ演奏において同音反復のフレーズは非常に多いが、それを大事だと思う人はそれほど多くない。作曲家の意図した音楽を意識し、アタックの輪郭を意識しなければ音楽が変わってしまうことがある。ベヒシュタインは音色の変化がタッチによって非常に明確にわかるので、ベヒシュタインを通して、よりたくさんの気づきを感じることができる。

その理由：ベヒシュタインの弦振動は、個性的な倍音構成を持っていることと、響板内の振動伝搬の工夫から、複数音が同時に鳴っている時にそれぞれの音が減衰していく時の濁りが少なく、音の分離性が良い。したがって、楽曲の理解がしやすく、美しい響きを追求でき、且つ、色彩感を表現しやすい。

### [演奏技術と音色について]

- ベヒシュタインは演奏者のタッチがそのまま表現されるシビアな楽器と言える。りきんで弾くとりきんだ音色になる。ベヒシュタインで練習することにより自分の出している音色を聴く能力が身に付き体の自然な使い方へと楽器が導いてくれる。

### [心に響く演奏]

- ベヒシュタインによる多様な音色変化は和声の役割（トニック・サブドミナント・ド

ミナント等)を聴き手に容易に伝えることができる。そのため、気持ちの高まりや静まり、喜びや悲しみ、不安や痛みなど演奏者がその音楽から感じている情緒を聴き手の心に直接訴えかけることができる。

### 3. 古楽器から学ぶ

楽譜の意味を響きの実際から考える

- フォルテピアノの音色の面白さは、余韻の中にある一つずつの音の解像度の高さ、音域による色彩の違いにある。18世紀～19世紀半ば頃までの音楽家が空間に描いた音楽は、このフォルテピアノのサウンドにインスピレーションを受けのではと感じる場面が多い。当時の楽器を知ることで、楽曲について気づきが生まれる。
- 演奏家の多くが、古楽器から学ぶことの重要性に気づきつつある。
- ベヒシュタインはこのフォルテピアノによって描かれる音楽の立体感を製造コンセプトのプライオリティーに置いたモダンピアノである。

### 4 その他

- 音楽指導とは、先生がさまざまな「音楽的提示」をし、生徒自らが知性と感性と情緒により自ら考えさせ、自らの意思で表現できる人間に育てることである。そのためにも、単なる弾きやすく大きな音の出るなどというだけで楽器を選ばず、演奏者の音楽的個性が十分に発揮できる優れた個性を持つピアノを選択すべきであろう。また、生徒自らが、自分の個性に合ったピアノを選ぶ感性を養えるようにすることがピアノ指導者の重要な役割である。
- ピアニズムというものは人それぞれで、「ピアノはこういったもの」という答えを定めないことで演奏の可能性を広げることができる。「自分の音色」の探求こそ、音楽の醍醐味である。そのためにもタッチに敏感に反応してくれるよい楽器が不可欠となる。
- 音楽教育の現場では、技術と表現の訓練がしばしば別々に論じられ、技術面に特化した訓練ということも行われているが、技術とは音楽表現の為にあるものである。

Bechstein Klavierschule の概念は、ベヒシュタインの個性が音楽表現の可能性を引き出すことを提唱するものであり、上記に整合しない音楽表現もあり得ることを否定するものではない。